

東京大学医科学研究所—微生物化学研究所 連携研究キックオフシンポジウム

医科学研究所講堂

“共創薬” で “社会をHappyにする”

10月3日（水）、東京大学医科学研究所と微生物化学研究所の連携研究キックオフシンポジウムが、医科学研究所講堂で開催され、双方の研究所から多数が参加しました。本連携研究のキーワードは、医科学研究所の清野所長が最初の挨拶で使われた“共創薬”でしょう。呼応して、微生物化学研究所の野本所長も、医科研の質の高い研究と連携し“社会をHappyにする”プロダクトを産生する、と挨拶されました。各々の研究所紹介（医科研・三宅 経理系副所長、微化研・高橋 知財産情報部長）からも明らかであったように、2つの専門性の異なる研究所が、互いに一致した意識で連携研究を進めようとしていることが如実に表れたキックオフシンポジウムでした。

微生物化学研究所は、野本明男生物系所長と柴崎正勝化学系所長の2人所長体制をとっており、野本所長が、以前医科学研究所教授であったことが、今回の連携研究実現化の鍵となりました。創薬の面で豊富な経験と沢山のリソースを有する微生物化学研究所は、約47,000の化合物のケミカルライブラリー、約40,000株の微生物ライブラリーに加え、さらに新規に深海底の菌や昆虫寄生糸状菌などの未開拓資源を開拓中とのことです。また、抗生物質を上市し、有機合成による改変・デザインなどに実績を持っています。微生物化学研究所から、五十嵐主席研究員、高橋主席研究員、渡辺主席研究員、川田主席研究員、4名の講演をいただき、このアピールに医科学研究所側も改めて興味を持ったのではないのでしょうか。医療指向の基礎研究を基調とする医科学研究所からは川口教授と山梨教授が、各々、ウイルス感染機構研究、疾患メカニズム研究の講演をしました。最後に、創薬には長い時間が掛るため継続的連携が必要と、三宅副所長が締めくくられました。とはいえ、創薬が連携研究により加速し、“社会をHappyにする”成果が早期に得られることを楽しみにしたいと思います。

清野宏 医科学研究所所長



天然化合物を得意とする微生物化学研究所と、医療研究「ベンチからベッドサイド」中心の医科学研究所、異なることを得意とする研究所が連携し、“共創薬”する。

野本明男 微生物化学研究所 生物系所長



これまで微生物化学研究所は既発表論文成果をもとにスクリーニングを実施してきたが遅すぎる。質の高い研究とのカップリングが必要。医科学研究所の基礎研究と緊密連携してプロダクトを産生し“社会をHappyにする”。

医科学研究所紹介

三宅健介 経理系副所長



医科学研究所の沿革を紹介、あまり知られていないエッセンスも(医科学研究所は移転前港区役所近くにあり碑が残っている、講堂の銅像になっている長与又郎は初代医科学研究所所長)。医科学研究所の組織、世界に誇れるリソース、国際連携等の紹介。

微生物化学研究所紹介

高橋良和 知的財産情報部部长



梅澤濱夫氏(カナマイシン発見者)に始まる沿革等を詳細に紹介。医薬品開発について、よく知られた抗生物質「カナマイシン」から第2、3、4世代抗生物質と開発を続けてこられた話は印象的。

五十嵐 雅之 主席研究員 (微化研 生物活性研究部)

「微化研における微生物/ケミカルライブラリーについて—多様性と天然物の魅力」

高橋 良昭 主席研究員 (微化研 日吉支所)

「最近の微化研の創薬研究の一例：新規抗結核薬CPZEN-45の創出と活性について」

渡辺 匠 主席研究員 (微化研 有機合成研究部)

「医薬関連化合物の触媒的不斉合成研究」

川田 学 主席研究員 (微化研 沼津支所)

「がんの特性を利用したがん治療分子標的の解析と抗がん剤の探索」

IMSUT

川口 寧 教授 (医科研 感染・免疫部門 ウイルス病態制御分野)

「ヘルペスウイルス感染の分子基盤と感染制御への応用」

山梨 裕司教授 (医科研 癌・細胞増殖部門 腫瘍抑制分野)

「神経筋シナプス形成シグナルとその破綻」

IMC

Institute of Microbial
Chemistry

東京大学医科学研究所—微生物化学研究所

キックオフシンポジウムを前に
微化研 と 医科研 の役職員



後列

諸田清
事務部長

今井浩三
病院長

村上善則
総務系副所長

三宅健介
経理系副所長

前列

梅沢洋二
分子構造解析部
部長

高橋良和
知的財産情報部
部長

柴崎正勝
化学系所長

野本明男
生物系所長

清野宏 所長

三宅俊昭
日吉支所長

鈴木晴生
事務局長

緑・医科研
青・微化研

シンポジウム後には、懇親会も開催されました。